

第1章

計画の策定にあたって

- 1 策定の背景と意義
- 2 計画の性格と位置づけ
- 3 計画の期間と対象
- 4 伊佐市の概況

1 策定の背景と意義

伊佐市は、平成30（2018）年に第1次伊佐市環境基本計画を策定し、より良い環境を次世代に継承すべく、様々な環境施策を推進してきました。

策定から5年が経過し、地域を取り巻く環境や社会情勢の急激な変化とともに、国際的な取り組みも大きく変化しました。

「持続可能な開発目標（SDGs）」の設定や「パリ協定」における国際的な環境政策の導入、令和2（2020）年2月ごろから世界に広まった新型コロナウイルス感染症による拡大防止のための人々の生活の変化、国内でのプラスチック製品の環境負荷低減施策、さらに令和4（2022）年2月に勃発したロシア国のウクライナ国侵攻により世界平和の均衡の瓦解など、様々な動きがありました。

また、令和4年6月策定の「伊佐市地球温暖化対策実行計画」を基に、令和12（2030）年度までの計画期間内に平成27（2015）年度と比べ温室効果ガス総排出量を46%削減する目標や、令和32（2050）年度の二酸化炭素排出量実質ゼロ（カーボンニュートラル）の達成に向けて、具体的な取り組みを始めています。

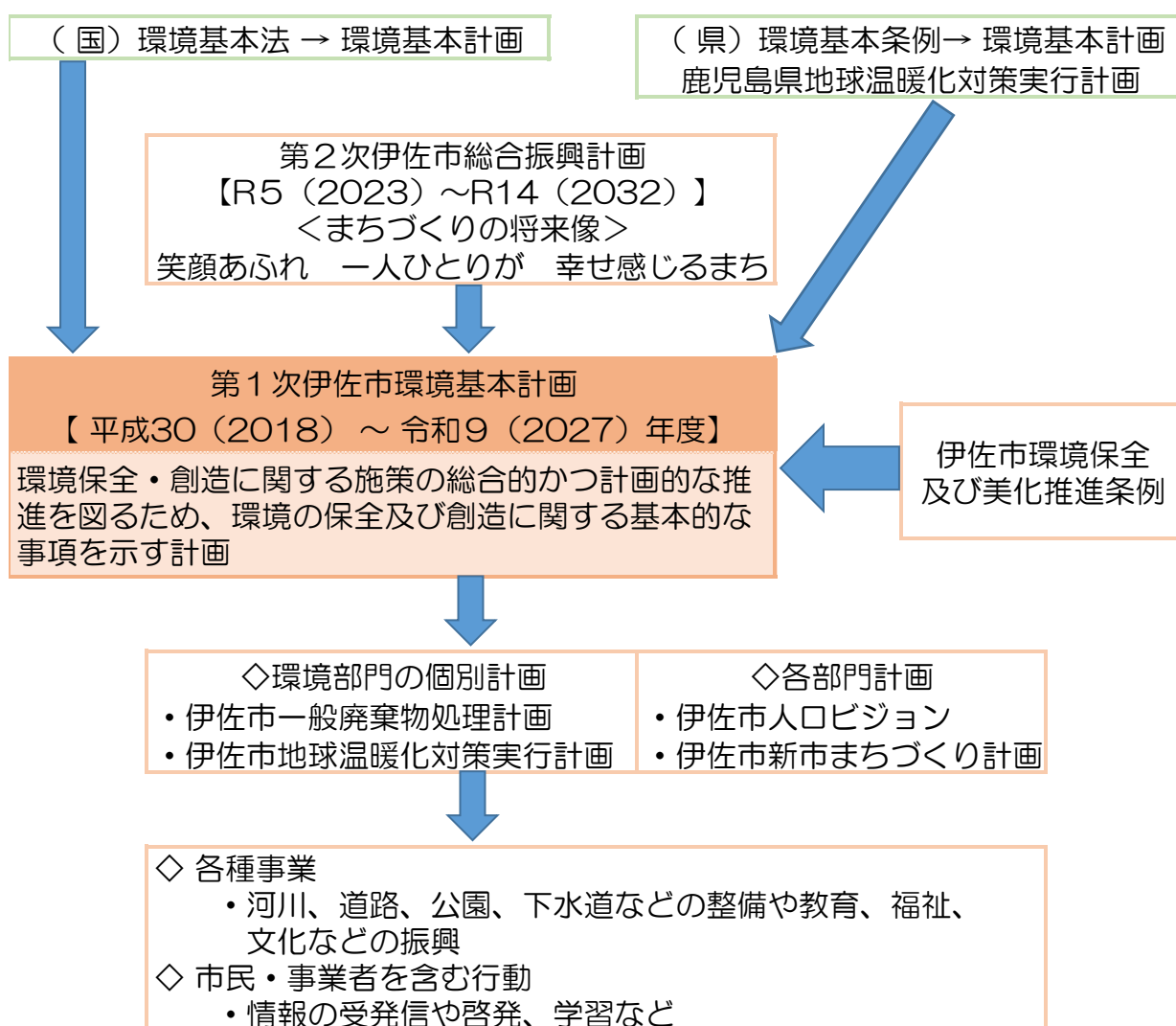
今回の見直しでは、基本的な方針等についてはこれまでの目標を踏襲しつつも、新しい取り組みや考え方、計画前半の検証結果を基にして目標の修正を行いました。

2 計画の性格と位置づけ

本計画は、「伊佐市環境保全及び美化推進条例」等に基づき、環境の保全に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、伊佐市の環境施策に関する各種計画の基本となる計画として位置づけます。また、最上位計画である「第2次伊佐市総合振興計画」に掲げる将来像の実現を環境面から推進する役割を担うこととしています。

本計画の見直しに際しては、今日の地球規模の環境問題や伊佐市の環境の現状などを十分に把握したうえで、今後の環境行政の指針とするものと位置づけ、「市・市民・事業者」の各主体がそれぞれ担うべき役割を明らかにし、また、相互に協力しながら、より良い環境の保全・創出に向けた取組みを推進することを目的としました。

<伊佐市環境基本計画の位置づけ>



3 計画の期間と対象

(1) 期間

本計画の期間は、平成30(2018)年度を初年度とし、令和9(2027)年度を目標年次とする10年間とします。なお、伊佐市を取り巻く環境や社会情勢の変化、科学技術の進展などを踏まえ、概ね5年後を目途に計画の見直しを行います。

初年度：平成30(2018)年度

中間見直し：令和5(2023)年度

目標年次：令和9(2027)年度

(2) 対象

本計画の対象とする環境の範囲は、生活に身近な環境の観点をはじめ、生活や事業活動に伴う観点、地球規模の環境の観点など、以下に掲げる範囲とし、幅広い視点で捉えることとします。

自然環境 ○ 豊かな自然景観や森林、水辺などの生態系を含めた環境

生活環境 ○ 大気、水、地盤、騒音、振動、化学物質など、健康な市民生活に関わる環境

資源循環 ○ 廃棄物などの発生を抑制し、そのうち有用なものを循環資源として利用することで、環境への負荷が低減される社会

地球環境 ○ 地球温暖化、オゾン層破壊など地球規模の環境

環境活動 ○ 環境教育・環境学習、環境保全活動

(3) 計画区域

本計画の対象は、伊佐市の行政区域とします。ただし、広域的視点に立って解決を図っていくべき問題や、連携することにより効果が得られる事項については、周辺自治体や関係機関との協力体制を深めながら、推進していくものとします。

4 伊佐市の概況

(1) 位置

伊佐市は、鹿児島県の最北端に位置し、標高は約160―1,000mであり、西部、北部、東部を肥薩火山群、南部を北薩火山群に囲まれており、熊本県水俣市、人吉市、球磨郡球磨村、宮崎県えびの市と接した県際地域となっています。

面積は392.56平方キロメートル（東西23km、南北27km）となっており、鹿児島県の総面積9,044.34km²の4.3%を占めています。

(2) 地形・地質

伊佐市は、伊佐（大口）盆地と呼ばれ、盆地特有の内陸性気候により、海岸沿いにある平地と比較して年平均気温が1～1.5℃低く、平成28（2016）年1月25日には、大口アメダス（標高175m）において、低地での九州の最低気温となる-15.2℃を記録するなど「鹿児島の北海道」と呼ばれています。

春や秋にはしばしば霧が発生します。盆地北部から南部へ羽月川が縦断し盆地南部を東から西へ横断する川内川に合流しています。盆地周囲には海岸段丘が分布しており、南部にはシラス台地がみられ、盆地中央から南東部にかけては菱刈丘陵が横たわっています。

地質は、基盤となる四万十層群の上に鮮新世から更新世にかけて活動した肥薩火山群や北薩火山群の噴出層が薄かったため、これが盆地の原型となりました。

この上に33万年前に加久藤カルデラから噴出した加久藤火砕流による溶結凝灰岩や、2万5千年前に始良カルデラから噴出した入戸火砕流によるシラスが積み重なっており、入戸火砕流以後は湖となり沖積層が形成されましたが、川内川の浸食によって3000年前までに排水され近世の盆地が形成されました。

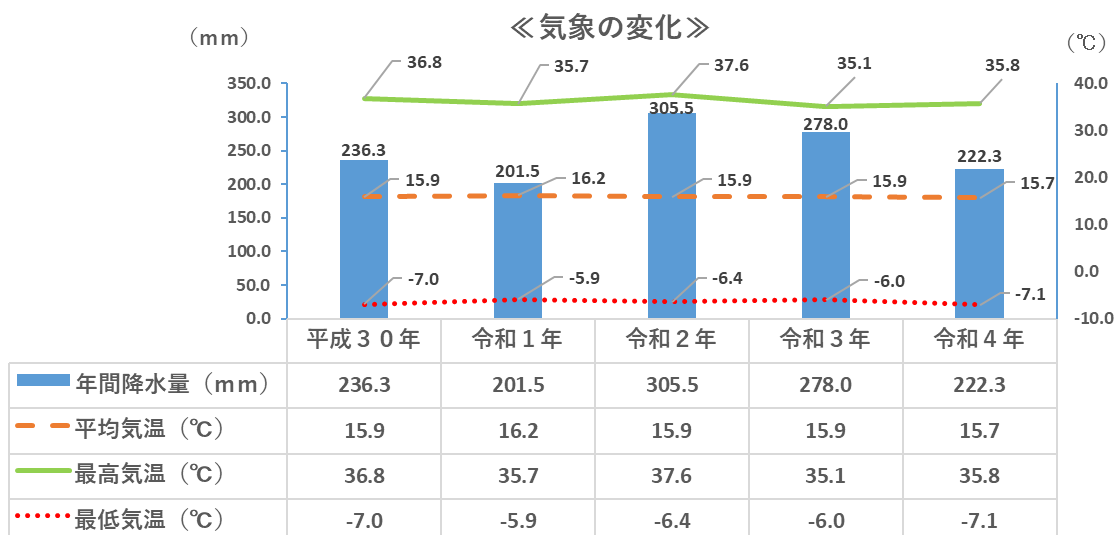
(3) 交通

伊佐市の交通網は、熊本県、宮崎県と接する県際地域であることから、市の中央部を国道の3路線が交差しています。国道268号（宮崎県えびの市～熊本県水俣市）、国道267号（薩摩川内市～熊本県人吉市）、国道447号（出水市～宮崎県えびの市）が走っています。

九州縦貫自動車道の栗野ICから20km（約25分）、横川ICから25km（約30分）、人吉ICから30km（約35分）、鹿児島空港から45km（約50分）、九州新幹線新水俣駅・出水駅からともに35km（約40分）、川内港・加治木港から50km（約55分）の圏域となっています。

(4) 気象

伊佐市の気候は、令和4(2022)年では平均気温が15.7℃、最高気温は7月観測で35.8℃、最低気温が1月観測で-7.1℃で、県内の他市町村に比べて最低気温が低く、寒冷です。年間降水量は年度によって増減の幅が大きく、最高・最低気温と平均気温は微増減を繰り返しながらほぼ同程度を維持しています。

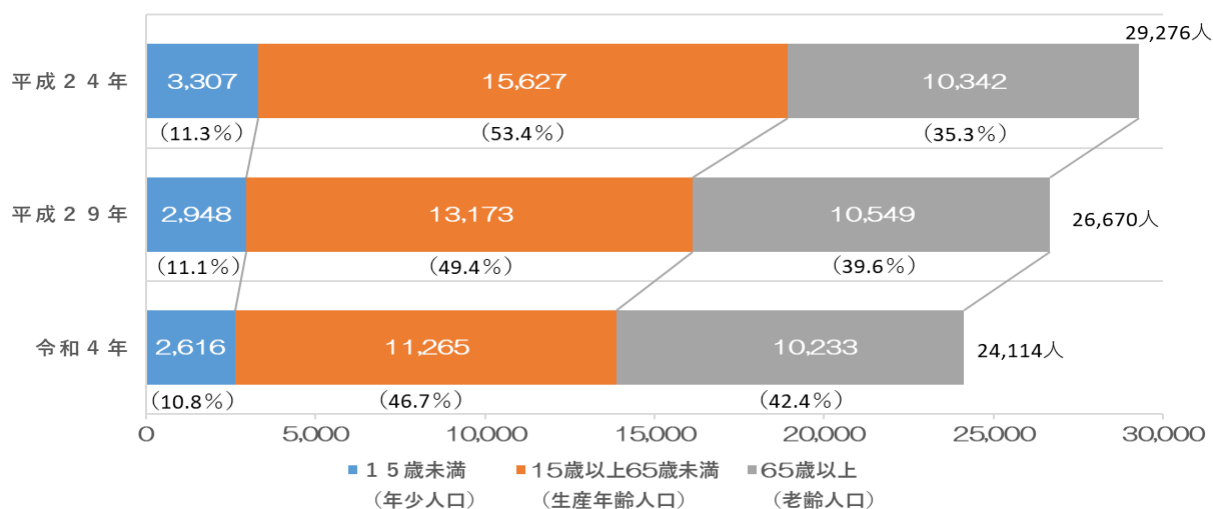


(資料：統計いさ)

(5) 人口の推移と高齢化

年齢区分別人口をみると、総人口が減少するなか、生産年齢人口と高齢人口の比率が近づきつつあり、また、平成30(2018)年には高齢化率が40%を超え、令和4(2022)年には42.4%に上昇するなど、伊佐市の少子高齢化は急速に進行しています。

年齢区分構成割合の推移



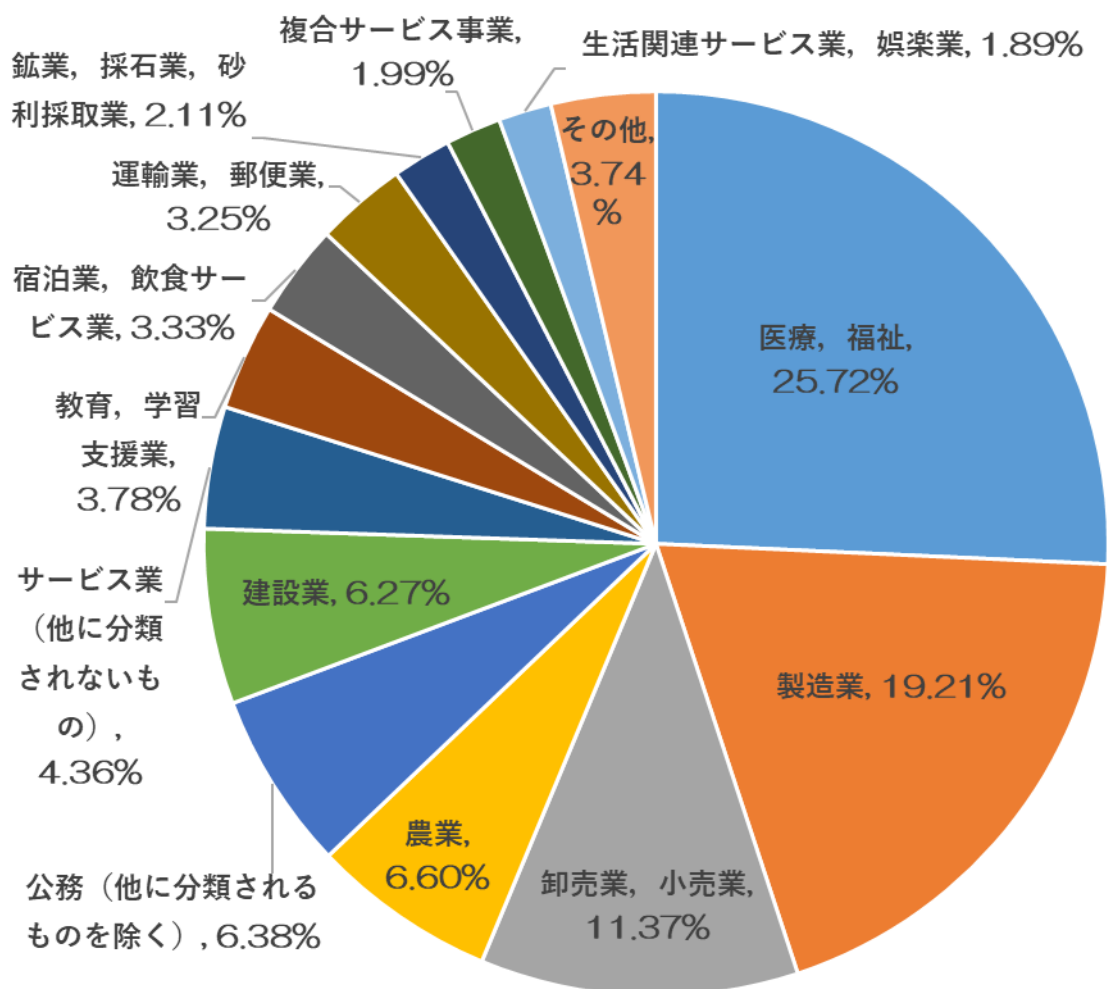
(資料：統計いさ)

(6) 産業

令和2（2020）年の15歳以上産業分類人口をみると、「医療・福祉」が25.72%、次いで「製造業」が19.21%、「卸売業・小売業」が11.37%、「農業」が6.6%となっており、この4産業で全体の約6割を占めています。

産業大分類別の就業者割合を前回の平成27（2015）年調査と比べると、「医療・福祉」が2.01%増加しており、「卸売業・小売業」が1.62%、「建設業」が1.18%減少しています。

【産業大分類別15歳以上就業者構成比（令和2年）】

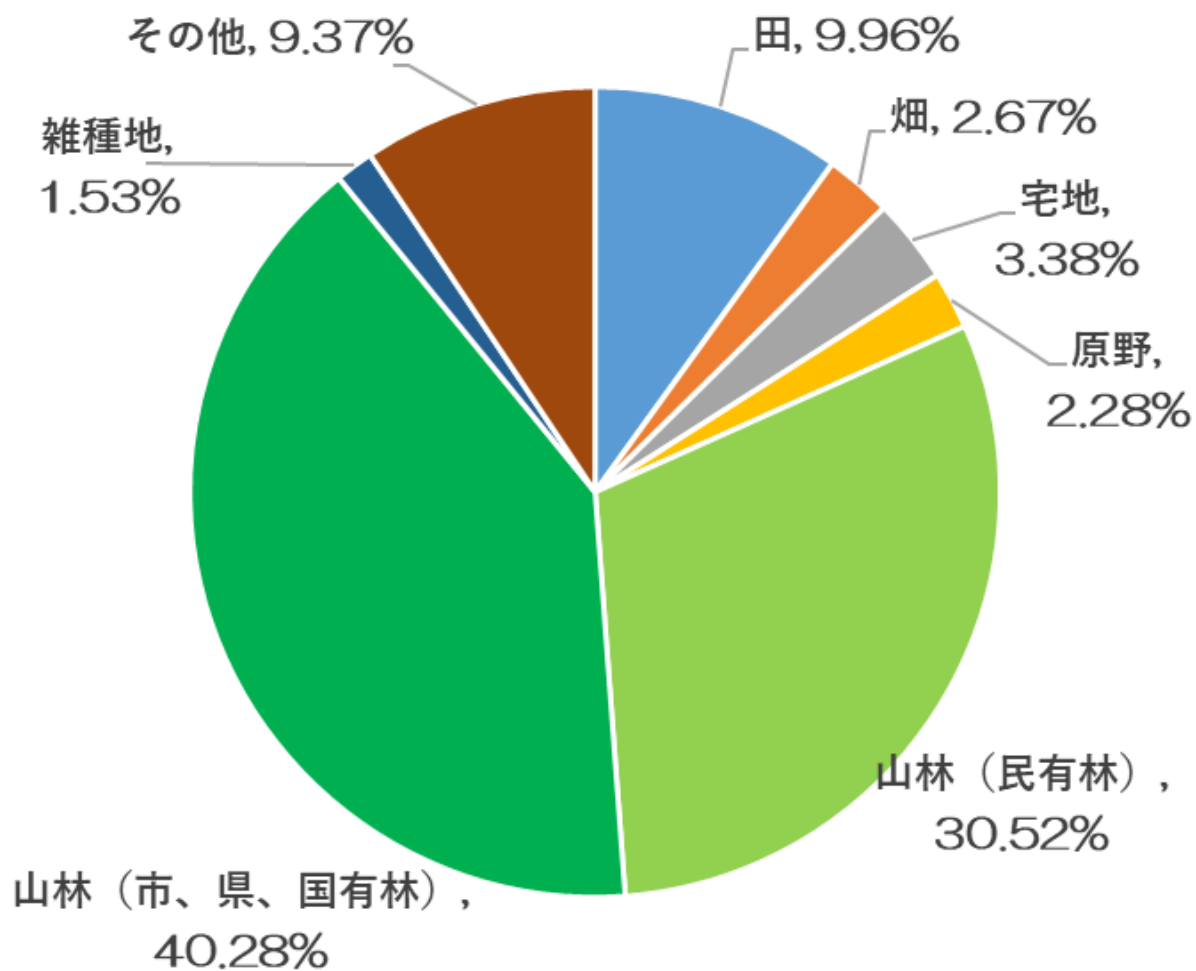


(資料：令和2年国勢調査)

(7) 土地利用

伊佐市の土地利用の状況は、山林が全体の約7割の70.8%と最も多く、次いで農用地が12.63%となっており、自然的土地利用が約83%を占めています。

その他の9.37%には、河川・池や公衆用道路などの公共用地が含まれています。



(資料：統計いさ)